昭和16年度運動会
大東文化学院は、1941（昭和16）年2月に九段校舎から池袋校舎へと移転しました。池袋の校地には運動場として使用できる校庭が整備され、移転した年より早速、運動会が開催されるようになりました。写真は、大東名物「イモ食い競争」の様子です。敗戦翌年の青砥校舎でも、新制大学となってからも運動会は開催されており、イモ食い競争は伝統の競技種目として特に盛り上がりを見せました。

Contents

❖「教育の大東」を構成する一員として
❖百年史編纂事業の進捗状況について
❖西脇玉峯「私の当時の思ひ出」
❖百年史編纂の現場から
❖大東アーカイブス活動記録

Daito Archives Newsletter

大東文化歴史資料館
ニューズレター
エクス・オリエンテ

Vol. 32

Ex Oriente

「教育の大東」を構成する一員として
～寝ている学生を見てあなたはどうしますか問題～

大東文化大学副学長

靜哲人（英語学科）

筆者はキャリアを中学高校一貫校の教員としてスタートし、その後高専を経て教員15年目に大学に移った。教員29年目に縁あって本学に職を得て、現在教員39年目である。一般論として大学の教員は教育者であると同時に研究者でもあるわけだが、私個人が自認する職業人アイデンティティの構成比率は教師が7で研究者が3くらい、もしくは教師の比率がもっと高いかもしれない。

したがってこれまでのキャリア39年間は自分のなかでは一貫して教師としてのそれである。すなわち「自分は英語教員39年目だ」という意識を持っている。中学・高校などの中等教育と大学での高等教育は質的に違うのである、「生徒」と「学生」は違うのだ、その違いが分からなければ大学で学ぶ資格も教える資格もない、と力説する方がたまにいらっしゃるが、そういう感覚は自分とは縁遠い。

外国語の習得という、宣言的知識（declarative knowledge）とともにそれを運用する手続き的知識（procedural knowledge）や発音する筋肉を制御するモータースキルも重視される専門分野のせいもあるのだろうが、教える相手が中学生であっても大学生であっても、扱うマテリアルやスキルのレベルが違うだけであって基本的には違いはないと感じている。（スポーツや書道なども当然モータースキルが重要だと思われるが、その分野を専門とする先生にも私と同じような感覚をお持ちの場合があるかどうか機会があれば伺ってみたい。）

中学生どころかサマーセミナーで教えた小学４年生から、2021年度で終了した教員免許更新講習を受講していた成人の現職教員まで、私が教える時の基本姿勢は同じである。到達目標とすべき手本を示し、やってみせ、やらせてみて、足らないところを指摘し、場合によっては叱咤し、激励し、できるようになれば褒める。少なくとも私の場合はこれに尽きる。

高校教員をしていた時、大学に進学して間もない教え子の言葉で今でも印象に残っているものがある。おおよそ「大学生になってわかったことがあります。先生は教授になれますが、教授は先生になれませんね。」のようなコメントだった。要は大学の先生の面倒見の悪さを感じたということだと推測する。中学・高校の先生は、授業の中に「やる気のない」（ように見える）生徒が混ざっていることは織り込み済みである。いろいろな生徒がいるのが当たり前なのであって、そのような集団をいかにして引っ張っていくかが教員の腕の見せどころなのだ、という感覚がある（と思う）。

卑近な例で言うと、「授業中に机に突っ伏して寝ているような、または私語をしているような生徒／学生がいたときに、あなたはどうしますか」問題だ。中高の先生は、そもそもそういう生徒を出さないような授業運営をすること、そして不幸にして出てしまったらそういう生徒がまた授業に参加できるよう働きかけることまでが自分の業務のコア部分だと捉えることが多いと思う。一方大学の先生は授業内容を提供することまでが自分の責務であって、それを受け止める・受け止めないは学生の側の問題だ、という感覚の持ち主が多いのではないだろうか。私語はともかく寝ている学生は放っておく（なんと冷たいことか！）人が多いだろう。（もちろんこれは、私が見聞きする範囲にはそういうパターンが多いように見えるということであって、それぞれのカテゴリーにもきっとイロイロな方がいるとは思う。）

これは職務範囲の定義の問題なのでどちらが正しいとか間違っているということではない。ただ一つ言えるのは、やる気がある学生、「できる」学生を教えるのは、誰でもできるとは言わないが、比較的には間違いなく楽であるということだ。そういう学生は、放っておいてもどんどん自分から主体的に学んでゆくこともできるだろうから、極論すれば生身の教師など要らないかもしれない。だから教師の存在が最も必要とされるのは、自力ではエンジンがかかりにくい「普通」の学生たちの教育においてである。自分の生身の魅力や迫力によってそういう学生たちも思わずスイッチが入ってしまうように働きかけることが教師としての自分の主たる存在理由である、というのが私個人の感覚である。

こういう人間なので自分の勤務する大学が「教育の大東」という標語を掲げているのを知った時は嬉しかった。、クロッシング2014の巻頭インタビューには当時の太田政男学長の言葉が以下のように掲載されている。

『2013年4月には学生を勉学、就職、日常生活まで幅広くサポートする「学生支援センター」を設立し、「教育の大東」という指針を目に見えるようにしました。』

こうしてみると学生支援センターは設立当初から「教育の大東」を支えるための組織としての定義づけもなされていたと言える。幸運なことに現在その組織の所長職も拝命している私は、その立場からも「教育の大東」の理念をさらに推し進めるという仕事が与えられていることになる。従来は主として学部事務室の領域とみなされていた学業面に直接関わる「授業など困りごとホットライン」を創設したことも、内容を一新した「学生認識／行動調査」に教育効果を測定する項目を含めたことも、学生が個別授業に関して普段から意見が言えるための「授業についての自由コメントシート」のシステムを提案したことも、学生支援センター設立当初の趣旨からそう外れたものではなかったことが確認できた。ついては引き続き「教育の大東」のため微力を尽くしてゆきたいと考えている。

大東アーカイブスの動き

百年史編纂事業の進捗状況について

百年史編纂委員会委員長
経済学部社会経済学科教授
中村宗悦

新型コロナウイルス感染症の収束がいまだに見通せないなか、それでもオミクロン株の特性を踏まえての感染症対策を講じつつ、年度当初より授業も原則対面で実施され、キャンパスにも活気が戻ってきました。

2023（令和5）年に創立百周年を迎える本学の記念事業の一環として位置付けられている百年史編纂事業に関しましてもこれまでの遅れを取り戻すべく、急ピッチで作業を進めています。とくに来年9月17日におこなわれる予定の記念式典にあわせて『大東文化大学百年史』上巻が刊行できることを目指して現在、手書き資料の文字起こし作業やページの割付作業などに取り組んでいるところです。

今、上巻と書きましたが、『大東文化大学百年史』は上・中・下の三巻（約1,800ページ）構成の“本格的”大学史になる予定です。上巻はおおよそ1923（大正12）年の創立前後から戦後の再出発までの時期を扱い、中巻ではその後の高度成長期における大学の拡張期を、そして下巻では1990年代以降の大学発展の歴史を扱う予定にしています。本格的というのは、単純に百周年の記念誌としてではなく、近代日本の教育史、ひいては日本の近現代史のなかにしっかりと本学百年の歩みを位置付けていくものにするという意味にほかなりません。本学の来し方をじっくりと見据えつつ、これからの行く末を見通すことのできる百年史を編纂していく所存です。引き続き、関係各位のご協力をお願いする次第です。

もう一つ、百年史編纂委員会は私立大学ブランディング事業の一環として『大東文化学院の人びと（仮題）』の製作にも取り組んでいます。『大東文化大学百年史』では十分取り上げることができない創立時関係者個々の横顔を、学生の皆さんにも知ってもらおうとする企画です。現在、Daito BASIS 科目としておかれている自校史教育「現代の大学」のテキストとしても使用を予定しています。本学は常々、自らを創立者のいない大学として認識して参りました。確かに本学には、慶應義塾における福沢諭吉や早稲田における大隈重信といった誰もが知るような創立時のリーダーはいなかったかもしれませんが、帝国議会の議決でもって自然とできがあったというものでもないこともまた明らかです。そこには多くの人びとの高等教育に対する情熱と努力が厳として存在していました。そうした今まであまり顧みられてこなかった先人の存在と大東文化大学へと確かに引き継がれていった創立の精神、理念といったものをこの本のなかで少しでも明らかにすることができればと思っています。こちらは2022年度末刊行を予定していますので、ご期待いただければ幸いです。

さて、百年史編纂委員会では引き続き百年史特設サイト（「継往開来」http://www.daito.ac.jp/100th/）の内容充実をはかり情報発信を進めて参ります。また今秋には大学全体の100周年特設サイトも起ち上がり、そのキー・ヴィジュアルやコンセプトとの関係もより深くなっていくことと思います。是非、ご覧いただき、ご感想などをお寄せいただければと思います。

最後に、2021年度末に無事、『大東文化大学史研究紀要』第6号を発行できましたことをご報告申し上げます。引き続き、第7号発行に向けて準備をおこなってまいります。『紀要』は、年1回の発行を予定しておりますので、大学史に関するご研究の発表などございましたら是非奮ってご投稿をいただきますよう、お願い申し上げます。ご投稿に関するご質問や資料情報のご提供などに関しましては、下記の100周年記念事業推進室内の大東文化歴史資料館事務担当までお知らせください。

大東文化歴史資料館事務室
（100周年記念事業推進室内）
電話／ 03-5399-7403　FAX ／ 03-5399-7391
archives@ic.daito.ac.jp

資料紹介

西脇玉峯「私の当時の思ひ出」

現在、大東アーカイブスでは、百周年記念事業の一つとして『大東文化学院の人びと』（仮題）の編集・執筆を進めています。今回はそのうちから、大東文化学院高等科一期生である西脇玉峯関係資料の一部を紹介いたします。

西脇玉峯は、大東文化学院高等科一期生です。最年長の学生の一人であり、53歳で入学しました。右の写真は前号の表紙にも掲載した高等科一期生および聴講生の卒業写真ですが、写っている全員が大東生で、ここに教員は含まれていません。これを見ると、特に高等科一期生には、西脇以外にも比較的年齢の高い学生が多数含まれていたことがわかります。（実は、翌年からは入学年齢の目安が設けられるようになり、ここまでの年齢の幅はなくなりました）。当時の高等教育機関全体の傾向として見ても、ここまで年齢層が広いことは希なことでした。なぜこのように幅広い年齢層の学生たちが、しかも日本各地から集まったのかというと、これには理由がありました。

1923（大正12）年12月に行われた第一回入学試験は、本科および高等科ともに数倍の受験倍率となったと言われます。本格的な漢学のための高等教育機関、しかも授業料は無料で教科書もすべて頒布され、さらに給費制度も完備という、当時としても希有な特典を持った学校の誕生は、経済的理由により進学を諦めていた地方の青年たちや、漢学の道をさらに追求したいと願いつつ中学校などで教壇に立っていた現役の漢文科教師たちに希望を与えるものでした。

西脇は大東文化学院時代に過ごした日々を、「私の当時の思ひ出」と題した原稿によって回顧しています。同稿は1941（昭和16）年12月発行の『東文』第一号に寄稿され掲載されたものなので、西脇が70歳になる頃に当時を述懐したものということになります。『東文』というのは、大東文化学院報告団雑誌班が編集発行した冊子で、巻末に記載された「あとがき」によれば、「この雑誌を単なる雑文芸雑誌などに堕としめるには余りにも貴重すぎると思ふ。我々は剣を執って倒れるその日まで祖国を熱愛するが故に学術を愛する」として高尚なる研究学術雑誌の刊行である旨を述べ、「西脇先生よりは学院創立当時の貴重なる体験談を頂戴するを得て、編者之にすぐる喜びを知らない」と感謝の意を表しています。

さて、同号に掲載された西脇による「思ひ出」は、「恐ろしい大震災のあった大正十二年の十月二十日の朝であった。私は学校へ出勤する前、萬朝報の二面を見ているとふと目についたものがある。それは大東文化学院の第一期学生募集広告であった」と始まります。西脇は、「月謝を要せず、且つ成績及び事情に依りて相当の給費を為す」という学校誕生に、「私の胸は何となく踊った」と続けます。西脇は当時、御茶ノ水にあった「K中学とK商業」に勤めていたと書いていますが、このK中学というのは京華中学校のことで、K商業というのは系列の京華商業学校のことを指します。西脇いわく、「貧乏教師」かつ「孫さえある」身で「滑稽で恥ずかしい気」がしながらも入学試験を受けに学院構内へ入ると、「四十格好の人が多かったので内心ホットし」、さらに西脇が受験生の控え室で出会い言葉を交わした人は61歳であったため、上には上があるものだと「大いに我が意を強くした」と続けます。こうして、改めて意を強くした西脇は、見事に大東文化学院高等科の難関入学試験を突破することができたのでした。合格通知が届いて、初めて妻や娘にこのことを告げた西脇は、反対する家族を説得し、大東へ入学することになりました。

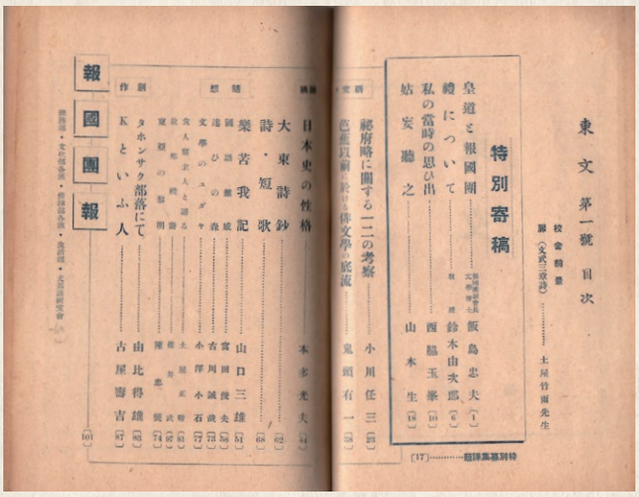
西脇と同期となる高等科一期生は21名、そのほか高等科には聴講生6名が入学したと公的には記録されていますが、西脇は入学式に参列した高等科一期生は23名であったと「思ひ出」に書いています。当時の聴講生は、卒業まで高等科正規生と分け隔てなく勉学をして過ごしたので、もしかしたら聴講生も加わって入学式に参列していたのかもしれません。

初年次の高等科在校生名簿は、次のようになっています。

秋谷竹三郎、秋山寛、上野賢知、柏木質、加藤梅四郎、熊沢猪之助、近藤杢、斉伯守、齋藤善太郎、相良政雄、澤田総清、七里重惠、菅波沼貴一、鈴木由次郎、高瀬七十七、茶谷忠治、内藤政太郎、長島万里、西脇玉峰、藤野岩友、与縄熊雄

このほか、聴講生には、荒木蒼太郎、江上新五郎、楠野俊成、高島愿、永原鉦作、姫田興壱が名を連ねました。なお、一期生のうち「若手」と称された上野賢知や近藤杢は、入学時40歳でした。七里重惠は37歳、澤田総清は32歳、相良政雄や藤野岩友は26歳、鈴木由次郎は最年少の23歳で入学していますが、20代はむしろ珍しく少数でした。

西脇いわく、「我らの仲間は皆勝れた人物で、しかも熱心な学究の徒」、「殊に近藤杢君の如きは、詩文に於ては己に一家を



為せる人であるから、午後の詩作の時には常に牛耳っていた。七里重惠君の如きは、二年の時、既に文部省の漢文の高等試験にパスした位である。孰れにしても皆職を擲って専心一意勉学に志した人々のことである」と仲間の様子を畏敬の念をもって描写しています。さらに、「毎日学院に行くのは非常な楽しみであった」と書いており、当時の学院生がいかに切磋琢磨しつつ学問を謳歌していたのかということが伝わってきます。西脇は高等科入学後も生活のために商業学校の授業を夕方に開講して続けていたので、週のうちの6日は朝7時から夜7時半まで家を不在にする、忙しくも充実した50代の毎日を送ったのでした。

入学から3年3ヶ月を経て、高等科一期生の卒業生名簿には、秋谷、加藤、熊沢、近藤、斉伯、澤田、七里、菅波沼、鈴木、高瀬、茶谷、内藤、長島、西脇、藤野、与縄の名前が確認でき、彼らの卒業時の進路については、次のように記録されています。

秋谷竹三郎　株式会社東京開成館編集長
加藤梅四郎　鹿児島県立女子師範学校教諭兼第二高等女学校教諭
熊沢猪之助　大阪府立高津中学校教諭
近藤杢　大東文化学院助教授　日本女子大学（ママ）講師
斉伯守　千代田女子専門学校教授兼千代田高等女学校教諭
澤田総清　東京府立第一中学校教諭
七里重惠　日本大学講師　大倉高等商業学校講師
菅波沼貴一　青森県立青森師範学校教諭
鈴木由次郎　東京市立第二中学校教諭
高瀬七十七　神奈川県立横浜第三中学校教諭
茶谷忠治　大阪府立天王寺師範学校教諭
内藤政太郎　大東文化学院助教授　ルーテル専門学校講師
長島万里　不詳
西脇玉峯　駒沢大学講師　京華中学校教諭
藤野岩友　麻布中学校教諭
与縄熊雄　熊本県立熊本第一師範学校教諭

これを見ると、高等科一期生の卒業後の進路は、師範学校や旧制中学で漢文科教員となる者が多かったことがわかります。特に、近藤杢と内藤政太郎は「官学派」教員に与し、高等科卒業後には学院助教授として採用され、本学発展に寄与していくこととなりました。西脇も後に大東文化学院教授となりますが、そのほかにも加藤梅四郎、沢田総清、鈴木由次郎などが他校の教員として経験を積んだ後、数年後には大東文化学院の教壇に立つこととなりました。彼らは戦時下から戦後復興期にかけての学校運営の中心的な役割を果たすこととなり、教授として真摯に学生指導に当たりました。

そのほか、特に西脇が優秀だったと回顧した七里重惠は、卒業後に日本大学や大倉高等商業学校で講師を勤めた後、法政大学や立教大学で教授となりました。藤野岩友は麻布中学教諭を経て國學院大學へと移籍、40年近くを勤めた後に名誉教授となっています。また、故郷に戻り教員となった卒業生も多く、師範学校や旧制中学などで漢文科教員として勤務する傍ら、研究活動も継続し、複数の著書を残していることが確認できます。なお、卒業生のうち長島万里の卒業後の進路が不詳となっていますが、学院入学時にはすでに『書誌神髄』（1915年）、『老子神髄』（1921年）などの著作活動を「天爵道人」の名で行っており、明治期には「血達磨」の筆名で『処世三十棒』（1909年）という明治世相を描いた随筆集を発表するなどしていました。生没年は不詳であるものの、卒業後も文筆活動を続けたようで、『皇道』（1932年）などが確認されます。活動時期から推察して、長島と西脇は同年代であったろうと考えられます。

他方、途中で退学したために、卒業生名簿には記載されなかった高等科一期生もいました。私学派教員の一斉辞職に対し意見したことが原因となって退学処分となったのは、秋山寛、上野賢知、相良政雄の3名でした。特に、上野と相良は助手（後に講師）として一時的に学院に呼び戻されたものの、官学派が優遇されていると学院へ進言したことがきっかけとなり、学院内の調和を乱したことを理由に辞職勧告を受け、1928（昭和3）年に再び学院を去ることとなりました。その後、上野は武蔵大学教授として約30年間にわたって教育に携わり、名誉教授となりました。一方の相良は高等科入学前、東洋大学を卒業して錦城中学校の教師をしていました。その前職の錦城中学校へ戻ったほか、二松学舎、国士舘、早稲田大学等で漢学講義を担当したものの、1941（昭和16）年に早世しています。秋山寛は、岡山県立岡山師範学校教諭となりました。そのほか、柏木質、齋藤善太郎は一身上の都合で退学しましたが、以降の詳細は不明となっています。

（歴史資料館専任研究員　浅沼薫奈）

資料寄贈ご協力のお願い

大東アーカイブスでは、引き続き本学関係資料のご寄贈をお願いしております。学園沿革史に関わる資料がございましたら大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室内）までご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

N e w s
百年史編纂の現場から

大東文化大学百年史編纂委員会副委員長
谷本 宗生

この資料館だよりである『エクス・オリエンテ』の第30号、31号でも言及しているとおり、本学100周年記念事業の一環として『大東文化大学百年史』の刊行を予定し、私ども編纂委員も原稿の執筆などにもっか精力的に取り組んでいます。それでは今回は、私がちょうど手がけている、百年史の第7章キャンパス再開発と創立60周年のなかで、創立60周年記念事業の内容について要点をお話したいと思います。本学の記念事業の取り組みが、歴史的にもよく分かるものであろうと考えます。

1983（昭和58）年9月20日の本学創立60周年を迎えるにあたり、82年1月に設置された大東文化大学創立60周年記念事業準備委員会より、同年3月の理事会に対して、創立60周年のための記念事業委員会を置き、その委員会のもとに創立60周年記念事業を遂行するよう提言されたのです。創立60周年記念事業計画の全体構成を、東松山キャンパス開発をはじめとした振興計画、中国語大辞典や学術研究誌“EX ORIENTE”の編纂、写真小冊子（学園60年史）などの記念出版、寄附金の記念募金、そして記念式典・祝賀会、記念講演といった記念行事、の柱立てにそってとらえられたものでした。

83年3月の学園評議員会でも示されている83年度事業計画においては、創立60周年記念事業を「単なる記念年度を迎えたとする以上の意義」、すなわち「本学将来の飛躍的発展の契機」としなければならないと強調しています。現代の動向からみても、とても時宜を得た趣旨だと感じられます。具体的な事業についても、記念募金（東松山開発計画の一環として建築される図書館建築事業）の募金予定額を7億円（一口：3万円）とし、募金期間を82年度～84年度（3年間）と掲げました。83年9月の創立60周年記念式典では、東洋学に関する学際的な学術記念講演などを行い、記念出版として、写真を主体とした本学の60周年を振り返る記念小冊子をはじめ、学術研究誌“EX ORIENTE”の復刻、中国学研究の論文集である『中国学論集』の刊行、中国語（近世・近代・現代口語）と中国文字（古文）とを総合した中国語大辞典の編纂を行うものとし、記念行事として、国際交流の一環として同年8月に中国の北京・上海で本学関係者らの作品による書法展、板橋校舎と東松山校舎の約50キロを徒歩行進するメモリアル・ウオーキング・ラリー、新しい応援歌の募集制作などを行うとしました。創立60周年記念のシンボルマークもさっそく設けて、各関係事業による相乗効果も発揮して、社会に対する本学としての力量（父兄・同窓ら関係者を含めた本学の連携協力）を十分に示そうという意欲にあふれた目標を事業全体で掲げたものでした。

実際、83年9月20日に開催された創立60周年記念式典・祝賀会（会場：ホテル・センチュリーハイアット）も、本学関係者をはじめ教育界・政界などからの参加者を含め、約1000名らが出席して盛大に挙行されました。会にあたっては、本学の大西経信理事長が「本学は創立60周年を契機として10ヵ年計画を策定し、東松山校舎を中心として教育施設の拡充整備を行っている。建学の先覚者たちが求めたものは、今日もっとも渇望されているものである」と挨拶を述べています。記念式典当日には、青山文雄（杉雨）教授と上条周一（信山）卒業生の書作品も添えられている、写真を中心とした本学60周年を振り返る記念小冊子『軌跡』も配布されました。式典当日の学術記念講演は、江上波夫氏（古代オリエント博物館長、東京大学名誉教授）による「日本における国家の形成ー倭人の国から大和朝廷へ」でした。農耕（東洋）と狩猟（西洋）の両面から、日本古代国家の形成を論究する講演内容で学術的に刺激的で素晴らしいものでした。

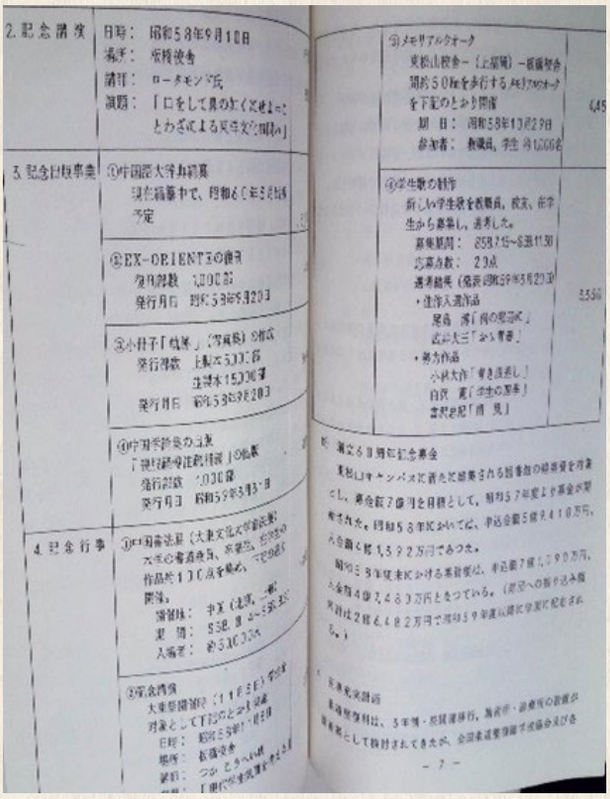
また学生部が窓口となり、創立60周年を記念して「誇りを与え友情と連帯感を育て、喜びをもって謳歌できる」新学生歌の募集を行いました。その結果、残念ながら優秀作品に該当するものはなく、佳作が2篇、努力作が3篇選ばれています。佳作については、広井大三教授（法学部）作詞の「おゝ青春よ」と、本科卒業生（8期）の尾島博氏作詞の「桐の窓辺に」でした。努力作は、在学生である小林大作氏（法律学科4年）作詞の「青き眼差し」、白沢寛氏（日本文学科4年）作詞・作曲の「学生の四季」、冨永忠紀氏（日本文学科4年）作詞の「朔風」でした。なお佳作入選作品については、新学生歌審査専門委員会委員である広瀬鐵雄氏（父兄会会長、武蔵野音楽大学教授）が作曲し、本学混声合唱団のコーラスによるテープ録音がなされ、新学生歌として誕生したのであります。

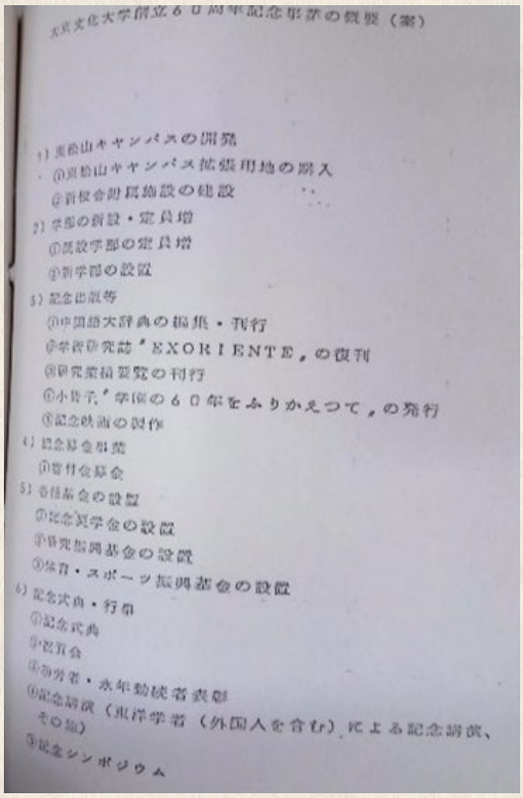
84年5月の学園評議員会では、大西理事長から学園の事業報告として、創立60周年記念事業の全体計画（記念式典、記念講演、記念出版、記念行事）にもとづくその実施状況などが説明されたのでした。その席上で、創立60周年記念出版として刊行された故影山誠一先生著による『喪服経伝注疏補義』（大

東文化大学文学部中国文学科編、84年3月、大東文化学園）も配布されたのでした。この時点において創立60周年記念事業の大概は終了し、残っている編纂中の記念出版としては、『大東文化大学創立60周年記念　中国学論集』（大東文化大学文学部中国文学科中国学論集編集委員会編、84年12月、大東文化学園）と『中国語大辞典』（大東文化大学中国語大辞典編纂室編（編集主幹：香坂順一）、94年3月、角川書店）でした。84年中に完成した『中国学論集』は、卒業生をはじめとする本学関係の研究者ら計48名による中国学研究の論集でした。82年4月より編纂作業が開始された『中国語大辞典』は、編集主幹の香坂順一が「古語、中世・近世・近代語を、現代中国語の立場から統合的に収めようするもの」（中国語大辞典の編纂をひきうけて）と強調されたとおり、着手からその完成までに延べ100名余りがかかわり、12年の歳月を要する大辞典（収録見出し語26万語）となりました。

記念募金の動向についても、同上の評議員会で報告されていますが、『大東文化』第355号（84年4月15日）で「7億円を突破　創立60周年の記念事業募金」として、同年3月末時点で目標額の7億円を突破して7億1090万4967円に達し、その内訳が在校生父兄1億707万273円、卒業生4596万8134円、一般・法人4億9432万4600円、教育職員2201万5567円、事務職員2383万円、附属学校関係1769万6393円であると、その詳細を学内外に周知していたのでありました。やはり、適切な情報公開を適宜行っていく姿勢は、教育・研究機関として、歴史的にみても重要なことであるとつよく感じました。

今回は、紙面の都合から創立60周年記念事業の要点をお伝えしたわけですが、関係資料の検討吟味といった作業も引き続きまして、百年史の編纂では本学に残されている理事会や評議員会の議事録などの基本資料をもとに鋭意進めています。





大東アーカイブス活動記録　2021年10月～2022年3月

10.7	全国大学史資料協議会全国総会・研究会参加（オンライン開催）
10.21	WG会議
10.28	総務課所蔵資料のデジタル化について打ち合わせ作業（目録照会） 展示室再開準備
11.9	総務課所蔵資料デジタル化について業者説明
11.10	土屋雅子氏より小川平吉関係資料受領
11.18	WG会議
11.24	紀要編集委員会 図書館所蔵資料の確認・移管手続き
12.8	ダイヤモンド社社史編纂に関する勉強会（講師、ダイヤモンド社坪井賢一氏） WG会議
12.16	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会･研究会参加（於：慶應義塾福沢記念展示館）
12.22	紀要編集委員会 WG会議
12.23	総務課所蔵資料デジタル化について業者説明 学内所蔵資料の移管手続き
1.11	100年史編纂事業業者キックオフ 『大東文化大学史研究紀要』説明会
1.18	全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於：國學院大学博物館）
1.20	管理課所蔵資料移管 総務課所蔵資料デジタル化について資料確認 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会参加
1.26	総務課所蔵資料デジタル化資料の貸し出し
2.10	中村宗悦館長、大阪経済大学「大学史編纂を検討するための講演会」において、 本学編纂事業に関する講演（オンライン開催）
2.28	ニューズレター「Ex oriente」vol.31発行
3.2	学内所蔵資料の移管手続き
3.10	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加（於；帝京大学博物館）
3.11	歴史資料館所蔵資料のデジタル化
3.16	百年史編纂委員会、歴史資料館運営委員会（オンライン開催）
3.31	『大東文化大学史研究紀要』第6号発行

お　知　ら　せ

新型コロナウィルス感染症（COVID-19）感染拡大防止対策として一時的に閉室していた板橋校舎2号館展示室ですが、2021年11月より開室しております。ご予約は不要で、来校時に自由にご覧いただけます。次回の新企画展公開日時については詳細が決定次第、ニューズレターやホームページなどでご案内いたします。そのほかの活動については通常通りです。ご質問などございましたら、大東文化歴史資料館事務室（100周年記念事業推進室）までお問い合わせください。

『大東文化大学史研究紀要』第7号 原稿募集

『大東文化大学史研究紀要』第7号に掲載する原稿を募集しています。投稿締切りは2022年12月中旬を予定しております。投稿をご検討される方は、2022年10月末日までにこちらのメールアドレスへお知らせください。ご質問等も随時受け付けております。

エントリー（投稿）・そのほかに関する問い合わせ先：
archives@ic.daito.ac.jp

「投稿規程」詳細については、百年史編纂サイト「継往開来」（https://www.daito.ac.jp/100th/bulletin/）でも公開しておりますので、必要に応じご確認くださいますようお願い申し上げます。積極的なご投稿をお待ちしております。

Ex Oriente

『Ex Oriente』（エクス・オリエンテ）は、かつて大東文化協会比較研究部が機関誌として1925（大正14）年4月に創刊した雑誌名でした。英仏独の3ヶ国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、西欧諸国へ向けて、東洋文化に関する最先端の研究成果を知らせたいとの目的で発行された同誌は、当時わずか3号のみの発刊（1988～93年に東洋研究所が続号として4～6号を発刊）となりました。以降、幻となっていた雑誌名を大東アーカイブスで受け継ぐことといたしました。

Ex Oriente | Daito Archives Newsletter Vol.32
発行：2022年7月31日
編集発行：大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10 大東文化大学徳丸研究棟3階
TEL 03（5399）7646　FAX 03（5399）7647
E-mail : archives@ic.daito.ac.jp
URL : https://www.daito.ac.jp/100th/archives/